

委員会等の会議録

1 会議名	第3回 愛南町事前復興計画策定懇話会	
2 議題	(1) 第2回愛南町事前復興計画策定懇話会での意見等について (2) アンケート調査(事前復興センサス)の結果について(速報) (3) 復興まちづくりに向けた地域ワークショップについて (4) 愛南町事前復興計画(骨子)ビジョン編について	
3 開催日時	令和7年2月22日(土) 16時00分から18時00分まで	
4 開催場所	御荘文化センター 大研修室	
5 傍聴者数	0人	
出席者		
6 委員氏名	二神 透、立石 和子、増田 智彦、宮崎 早苗、森岡 知昭、山口 憲昭、山田 功、湯浅 良彦、古川 哲也、ヤング 亜由美、清水 広幸、本多 清久、広瀬 昌弘、大野 真由、宗田 清昭、江川 昌克、清水 諭、白石 克志、河野 成司 (アドバイザー)羽藤 英二、菊池 雅彦、山本 浩司 (意見発表)南宇和高校生	
7 担当所属	所属名	防災対策課
	担当職員 (職・氏名)	課長 土居 章二 主査 吉田 雅俊
8 その他の出席職員	所属名	総務課、建設課
	出席職員 (職・氏名)	総務課長 立花 慶司 建設課長 吉村 克己
議事内容(次ページから)		

発言者	発言内容
土居課長	<p>(開会挨拶及び配布資料確認)</p> <p>それでは、本日の会議の流れについて、担当の吉田から説明します。</p>
吉田主査	<p>(会議の進行について説明)</p>
土居課長	<p>それでは、議事に入ります。ここからの進行は、二神委員にお願いします。</p>
二神委員	<p>それでは、議事に入ります。まずは、(1)「第2回愛南町事前復興計画策定懇話会での意見等について」について、事務局の説明を求めます。</p>
吉田主査	<p>(第2回愛南町事前復興計画策定懇話会での意見等について説明)</p>
二神委員	<p>引き続き、(2)「アンケート調査(事前復興センサス)の結果について(速報)」の説明をお願いします。</p>
吉田主査	<p>(アンケート調査(事前復興センサス)の結果について(速報)説明)</p> <p>続けて、(3)「復興まちづくりに向けた地域ワークショップ」について、「愛南町事前復興計画策定コンソーシアム」の代表企業であるコンサルタントから説明します。</p>
愛南町事前復興計画コンソーシアム	<p>(復興まちづくりに向けた地域ワークショップについて説明)</p>
二神委員	<p>事務局から三つの議事について説明がありました。この件について、何か御意見、御質問はありませんか。</p>
白石委員	<p>資料4の2ページにアンケート結果の概要が掲載されていますが、「集団移転が良いのか、それともソフト対策が良いのか」といった点について、住民の回答では判断が難しい形で示されているように見られます。</p> <p>ここで確認したいのは、このアンケートの質問は、「事前復興」を前提としたものなのか、「被災後の復興まちづくり」を前提と</p>

<p>愛南町事前復興計画 画コンソーシアム</p>	<p>したものなのかという点です。この前提条件が明確でないと、住民の回答の意図が正しく把握できない可能性があるため、どのような意図でこの設問が作成されたのか、御説明いただければと思います。</p> <p>今回のアンケート調査は、「被災後」をイメージした内容として設計しています。</p> <p>具体的には、発災直後の1、2週間後の生活再建の変化を想定しながら回答いただく形で、最終的に2、3年後の復興まちづくりの方向性について住民の意向を把握する形で調査を実施しました。</p> <p>そのため、アンケートの設問は、「事前復興のために、あらかじめ準備すべきこと」を尋ねるものではなく、「被災後の生活再建や復興まちづくりをどう考えるか」という視点で設計しています。</p>
<p>広瀬委員</p>	<p>高台移転などの意見が出ていますが、激甚災害に認定され、国がある程度の資金を確保しない限り、愛南町の予算では対応できないのではないかと思います。</p> <p>そう考えると、結局のところ、災害後の復旧対応にならざるを得ないのではないのでしょうか。復興の事前準備を進めることは良いと思いますが、私は、災害そのものをできるだけ小さくするべきではないかと考えます。現在の町の予算では、とても対応しきれないのではないのでしょうか。</p>
<p>土居課長</p>	<p>被災が激甚災害に認定されないと事業費の確保が難しく、大規模な課題への対応は難しいと考えています。</p> <p>しかし、被災してから考え始めるのでは、スピード感をもって迅速な復旧や復興に取り組むことが困難になります。</p> <p>なかなかイメージしにくいかもしれませんが、だからこそ、皆様にお集まりいただき、事前に復旧、復興のプロセスを検討しておくことが重要だと考えています。本懇話会では、そのような視点を踏まえて議論を進めていきたいと思っています。</p>
<p>二神委員</p>	<p>事前復興センサスにおいて、若年層の回答数が比較的少なかったとのことですが、今後、回答数を増やすための工夫を検討されるのでしょうか。それとも、現在のデータを基に分析を進める予定でしょうか。今後の対応についてお聞かせいただければ</p>

<p>愛南町事前復興計画コンソーシアム</p>	<p>ばと思います。</p> <p>今回のアンケートでは、高齢者の回答が多かったという結果が出ています。そのため、今後は若い世代の意向を、よりの確に把握することが重要だと考えています。</p> <p>ただし、同じ手法で再度アンケートを実施しても、同様の結果になる可能性が高いため、調査方法に工夫を加える必要があると考えています。引き続き、若い世代の意見をより確実に反映できるよう、適切な方法を検討してまいります。</p>
<p>二神委員</p>	<p>それでは、次の議事に移ります。</p> <p>(4)「愛南町事前復興計画(骨子)ビジョン編について」について、事務局から説明を求めます。</p>
<p>吉田主査</p>	<p>(愛南町事前復興計画(骨子)ビジョン編について説明)</p>
<p>二神委員</p>	<p>事務局から説明がありました。委員の皆様には、もし明日大きな地震が発生した場合、自分自身は何をすべきかを考えながら、愛南町の「目指す姿」と「目標」について、それぞれの立場から御発言いただければと思います。</p>
<p>大野委員</p>	<p>復興後の目指す姿として、医療体制の確保は非常に重要だと考えます。また、愛南町は農業、林業、水産業が盛んな地域です。これらの産業を持続可能な形で発展させていくことが、町の将来を考える上で欠かせない要素だと思います。</p> <p>よく、「仕事がないから町を出る」という声を聞きます。しかし実際には、多くの求人があるにもかかわらず「人手が足りない」という状況が続いています。</p> <p>これは、需要と供給がうまくマッチしていないことが原因ではないでしょうか。愛南町には素晴らしい自然や地域資源があるにもかかわらず、町の魅力が十分に発信されていないため、新たな人材が流入しづらいという課題があるように思います。</p> <p>そこで、例えば「農業、林業、水産業の後継者不足を解決するための仕組み」、「移住者や新規就業者を積極的に呼び込むためのプロモーション」「漁村、山村留学」のような取組を復興前から導入し、地域の活性化につなげるという施策を今から進めておくことで、復興後も町を持続させる仕組みを作れるのではないかと考えます。</p>

<p>広瀬委員</p>	<p>町民が、復興計画や防災対策について、「今、町が何を考え、何を準備しているのか」を知ることは非常に重要です。「うちはこういう状況です。」「こういう対策を進めています。」という情報を、分かりやすく、継続的に発信していくことが、住民の安心につながるのではないのでしょうか。</p> <p>愛南町がより良い未来に向かうために、町全体で「考え続け、行動し続ける」ことが大切だと思います。</p> <p>復興のガイドラインについて一定の方向性が示されていると感じています。ただし、その前段階として、事前の復興に向けた準備、特に「どの場所に何を配置するか」といった選定作業が非常に重要だと考えています。</p> <p>特に、事前に「人が集まる場所」や「産業の復興拠点」となる場所を選定しておくことが、災害後の復旧、復興のスピードを左右するのではないかと思います。その意味で、現在進められている計画の中に、こうした視点がしっかりと組み込まれているのかを、改めて確認しておく必要があるのではないのでしょうか。</p> <p>今回の懇話会は、様々な立場からの貴重な意見を聞くことができる場であり、とても有意義なものだと思います。ただ、その意見がどのように計画に反映され、実行に移されるのかがより明確になると、更に議論の質が高まるのではないかと考えています。</p>
<p>本多委員</p>	<p>「早期の復旧が大切」と言葉で言うのは簡単ですが、実際に養殖業の現場で何が起こるかを考えると、決して単純な話ではありません。単に「復旧」するだけでは不十分で、災害に強い養殖業の仕組みを事前に作っておくことが必要ではないかと感じています。</p> <p>災害が起きたとき、我々養殖業に携わる者にとって、「まずは船を守ること、そして人命を守ること」が何よりも最優先になります。「港に戻ることができない場合、沖に避難するしかない」という現実を踏まえ、実際の津波の影響や安全な避難方法について、更に深く検討していく必要があるのではないのでしょうか。</p>
<p>清水広幸委員</p>	<p>大野委員が指摘されたように「求人はあるのに若い人が地元に戻ってこない」という課題は、愛南町の将来を考える上で最も重要な点の一つではないかと思っています。</p>

	<p>現在、若い人材が都会へ流出し、町に戻ってこないことが大きな課題となっています。また、若者の声を十分に聞く機会が必要だと思います。</p> <p>「町の未来をどうしていくのが一番良いのか」「どうすれば定住、移住しやすくなるのか」という視点を持ち、もっと若い世代との交流を深めながら、町の在り方を一緒に考えていくことが大切ではないでしょうか。</p> <p>商工会の活動は水産業、農林業とは異なりますが、地域経済の再建という点では密接に関わっています。目標2の「地域経済の再建」についてですが、基幹産業＝水産業、農林業と捉えられている印象があります。これらは愛南町にとって大切な産業ですが、それ以外の業種にも多くの方が関わっていることを忘れてはならないと思います。</p> <p>そうならないように、より多様な産業が含まれる表現を盛り込んでいただくと、多くの事業者の意識も高まり、計画への理解や協力が得られやすくなるのではないかと思います。</p> <p>事前に何ができるのかを明確にし、商工会、事業者、市町が連携して準備していくことが重要だと感じました。補助金申請のためのガイドラインを策定することや、必要な情報を事前に整理しておくことなど、事業者がスムーズに復旧、復興に取り組める仕組みを作るべきではないでしょうか。</p>
<p>ヤング委員</p> <p>古川委員</p>	<p>子供の数がどんどん減って、学校もなくなりつつある中で、「いざ地震が来たらこうします」と計画を立てても、そもそもマンパワーが足りないのではないかと不安を強く感じています。やはり、若い人が定住できる環境づくりが不可欠です。そして、都会に出た人たちが「やっぱり愛南町は良いな、帰りたいな」と思えるような町にしていかないと、どれだけ良いビジョンを掲げても実現が難しいのではないかと感じています。</p> <p>私自身、教育に携わる立場ですが、何よりも大事なものは「この町に未来がある」と子供たちが思えることだと考えています。そのために、子供たちに地域の魅力を伝えていくことが重要です。</p> <p>産業、文化、人のつながり、町の歴史など、地域の誇りを学べる機会を増やし、「将来はこの町で暮らしたい」と思う子供が一人でも二人でも増えてくれたらと願っています。</p> <p>その積み重ねが、最終的に町の再生につながるのではないで</p>

<p>湯浅委員</p>	<p>しょうか。私も教育者として、子供たちの「愛南町への愛着」を育むことに力を注いでいきたいと思っています</p> <p>子供たちの安全と健やかな成長というものが最も重要な視点だと考えています。</p> <p>先ほど古川委員もおっしゃっていましたが、子供たちの数は減少傾向にあり、地域との関わりもますます重要になってきていると思います。</p> <p>そうした中で、学校、家庭、地域が一体となり子育てに取り組むことが、今後のまちづくりにおいても鍵となるのではないのでしょうか。一人一人が「自分と町の未来」について考えられるような仕組みをつくる必要があります。</p> <p>そうした動きが有機的につながりながら、理念に沿ったまちづくりが進んでいけばと願っています。「共に支え合う災害に強い活力ある町」という目標や、「愛南ならではの魅力や新たな価値の創出」という方向性については、大変共感しています。また、子供たちの意見を積極的に取り入れながら、未来につながるまちづくりを進めることが重要だと考えます。</p>
<p>山田委員</p>	<p>私は、復興後のまちづくりにおいて、健常者の視点ばかりが重視されがちであることに、日頃から違和感を持っています。</p> <p>復興の過程において、地域全体の再建が重要なのは間違いありませんが、障害者や高齢者が暮らしやすい環境をどう整えていくかという議論は、もっと優先的に進められるべきではないかと考えています。</p> <p>例えば、バリアフリーのまちづくりについても、地域の協議会や行政の中で話し合われることはありますが、現場の意見が十分に反映されているとは言えないと感じます。</p> <p>実際に私自身も、「まちづくりに参加したい」と考えている障害者の方々の声を聞く機会があり、「私たちもできることがあるのに、議論の場にすら入れてもらえない。」という不満を持つ人もいます。そうした方々が、復興後に町を離れてしまうことのないよう、本当に住みやすいまちづくりとは何かを、障害者や高齢者の目線でしっかりと考えていくことが必要ではないかと思っています。</p>
<p>山口委員</p>	<p>私の住んでいる地域の状況についてお話しすると、子供たち、特に柏小学校の児童は防災意識が非常に高く、積極的に取り組</p>

宮崎委員	<p>んでいる一方で、大人の防災意識が極端に低くほとんど危機感を持っていないという、世代間のギャップが非常に大きいと感じています。このギャップをどう埋めるのかが、今後の大きな課題ではないかと考えます。</p> <p>事務局の皆様には、大変丁寧に資料を作成していただいておりますが、地域を実際に動かしていくための具体的な活動を、よりスピーディーに展開していく必要があるのではないかと感じています。</p> <p>時間的な余裕がない中で、どのように効果的に地域を巻き込んでいけるか、今後の取組を是非、御検討いただければと思います。</p> <p>私の仕事柄、「地域に暮らす人々の普段の暮らしの幸せ」というものを、住民の皆さんと日々考えながら取り組んでいます。</p> <p>現在、地域には、自治会、サロン活動、老人クラブ、青年団、婦人会など多様なコミュニティがあります。しかし、どの団体も共通して抱えている課題が「後継者不足」です。</p> <p>社会福祉協議会としても、地域共生社会の実現に向けて、世代を超えた交流や、各種団体の壁を越えた連携を進める活動を行っていますが、地域のつながりを維持し、強化していくことは年々難しくなってきました。</p> <p>また、災害発生後の「コミュニティの再生」についても、単に「地域に戻れば元通りになる」というわけではありません。東北の震災後や、今回の能登半島地震後でも、仮設住宅から出られる段階になっても、「出たくない」という人が多いという話を聞きます。なぜかというところ、「新しい地域で、またゼロから新たなコミュニティを作らなくてはいけないことが不安」だからです。</p> <p>このような実態を踏まえると、「復興後にコミュニティを再生する」のではなく、日頃から世代を超えたつながりを形成しておくことが重要ではないでしょうか。そのためには、計画の中に具体的な施策を盛り込み、事前の取組を進める必要があると思います。</p> <p>「日常的に「地域でのつながり」を強化する仕組みをつくる」、「各種団体や世代を超えた連携の場を増やし、復興後の「新しいコミュニティの受け皿」を用意する」、「避難後のコミュニティづくりへの不安を軽減できるような支援体制を考える」、こういった視点を、是非、事前復興計画の中により具体的な形で落</p>
------	---

<p>立石委員</p>	<p>とし込んでいけたらと思います。</p> <p>一本松地域では、「高台にあって津波避難ができる場所だから安心」と思われがちですが、公衆トイレの多くが和式であるという実態がありました。</p> <p>また、西海地域にも公衆トイレが複数ありますが、やはり高齢者や足腰が弱い方、障がいをお持ちの方にとって和式トイレは非常に使いづらいのが現状です。</p> <p>これは災害時に大きな課題となる可能性があるため、事前にバリアフリー化を進めるなどの対策ができるのではないかと考えます。</p> <p>また、消防団内でも話しているのですが、4月の地震の際に「内海地域の対応」が難しかったという点も課題だと考えています。内海地域では、宇和島市や宿毛市と隣接しているため、対応範囲が重なることがあります。そのため、他自治体との連携が重要になってきます。</p> <p>団長とも話しましたが、「自治体を超えた合同訓練」ができれば、より実践的な防災対応が可能になるのではないかと考えています。もちろん、具体的にどのように進めていくかは、今後の調整が必要ですが、消防団としても、自治体間の連携強化に向けた取り組みを進めたいと考えています。</p>
<p>宗田委員</p>	<p>災害が発生した際には、国道56号線の崖崩れなども想定されます。仮に道路が寸断された場合、火葬場に遺体を搬送すること自体が難しくなるのではないのでしょうか。そういった点を考慮すると、近隣市町に火葬場を要請するという方針だけでは、現実的に機能しない可能性があると思います。</p> <p>このような状況を考えると、愛南町でも「最悪のケース」を想定し、具体的な代替案を準備しておくべきではないのでしょうか。例えば、仮埋葬をする場合、公共用地の使用が現実的な選択肢になると思います。そうすると、学校の運動場、使用されていない広場などが候補になるかもしれません。</p> <p>しかし、仮埋葬後の掘り起こし作業を「誰が担うのか」という問題が生じます。正直なところ、一般の住民が進んでこの作業を引き受けるとは思えません。また、単に「広域火葬で対応する」という案にしても、町民の理解を得るのは簡単ではないでしょう。そうした点を踏まえ、事務局にはより踏み込んだ具体策の検討をお願いしたいと考えています。</p>

<p>江川委員</p>	<p>現在、土砂崩れなどの災害リスクに備えた対策が求められています。この点については、今後、市町村と調整しながら対応を進めていく考えです。</p> <p>また、私たちにとって最も重要なのは、1日も早い道路の開通です。これが、災害時の復旧・復興のスピードを大きく左右しますので、皆様の御支援、御協力をお願い申し上げます。</p>
<p>白石委員</p>	<p>湯浅委員からは教育や子育て支援に関する御意見、山田委員からは障害者福祉に関する視点が示されました。</p> <p>資料2に記載された目標や方針は非常によく整理されていると感じましたが、「生活の質の向上」という観点がやや不足しているように思います。</p> <p>是非、目標や方針の中に「被災前よりも暮らしやすいまちづくり」という視点を、明確に組み込んでいただければと思います。また、私は都市計画部を担当していますので、復興計画に「コンパクトで持続可能なまちづくり」の視点を加えていただくことを御検討いただければと思います。</p> <p>災害からの復興に当たっては、単に元の状態に戻すのではなく、より住みやすいまちを目指すことが重要です。そのためにも、都市のコンパクト化や持続可能性を意識した復興計画を、是非骨子の中に反映していただければと思います。</p>
<p>清水諭委員</p>	<p>私は、今年2月上旬に能登半島地震の被災地である輪島市を視察しました。その際、断水によって生活用水の確保が極めて困難であり、下水道の機能も停止していたため、トイレが使えない状況でした。その結果、衛生環境が悪化し、避難所での健康被害やストレスの蓄積が深刻な課題となっていました。</p> <p>この事態を受け、国では「スフィア基準」に基づく避難生活環境の整備や、「TKB(トイレ、キッチン、ベッド)」の設置ガイドラインを策定し、これらに対応するための交付金制度が設けられています。</p> <p>町としても既に十分検討されていると思いますが、今一度、これらの新たな動向を踏まえて急ぐべき対策から着手し、必要に応じて見直しや点検を進めていただきたいと思います。</p> <p>インフラ企業や防災関係機関との連携を強化し、継続的に関係を維持することが重要です。これにより、復旧、復興を迅速に進めることができ、住民の定住意欲の維持にもつながると考</p>

<p>河野委員</p>	<p>えます。地域の未来がしっかりと見通せるような計画を策定し、住民が安心して暮らせる環境を整備していただければと思います。</p> <p>ビジョン編についてですが、道路や港湾などの社会インフラの整備は、復興の基盤となる極めて重要な要素です。現状の計画案では、これらのインフラ整備についての直接的な記述が少ないように思いますが、今後の策定過程でしっかりと位置付けていただければと思います。</p> <p>もう一点は、町長からも発言があった BCP(事業継続計画)についてです。</p> <p>私たちも建設業の BCP 策定を進めており、愛南町内の土木関連企業の中には既に BCP に取り組んでいるところもあります。実効性を高めるために、毎年訓練を実施し、災害発生時に迅速に対応できる体制づくりを進めています。</p> <p>発災時にはこの BCP が有効な手段となるため、建設業以外の業種においても、BCP の導入を積極的に進めていただきたいと考えています。</p>
<p>二神委員</p>	<p>委員の皆様、ありがとうございました。</p> <p>委員の皆様の意見等を聞いて、南宇和高校生の皆さんから一言お願いします。</p>
<p>南宇和高校生①</p>	<p>今日の議論を通じて考えたことは、災害が発生する前や、発生後の状況は想像しにくいものですが、それでも真剣に「自分ごと」として考えることが大切だということです。</p> <p>しかし、まだまだ「自分ごと」として捉えられていない住民の方も多いのではないかと感じました。そのため、より多くの人が真剣に考えられるような活動や情報発信を、高校生の立場から積極的に進めていきたいと思いました。</p>
<p>南宇和高校生②</p>	<p>私は、復興後の理想の姿として、若者がいる町であることが重要だと考えています。そして、現在この町に住んでいる人々に「将来、たとえ町を離れたとしても、また戻ってきたい」と思ってもらえるような愛着を持ってもらいたいです。</p> <p>そのためには、地元住民だけでなく、外部の方々とも積極的に関わり、世代や立場の垣根を超えたコミュニティづくりが大切だと考えています。</p>

<p>南宇和高校生③</p>	<p>このようなコミュニティが築かれることで、災害発生時の共助につながり、「犠牲者ゼロ」という目標の実現にも貢献できるのではないかと思います。</p> <p>「住み続けられるまちづくり」というキーワードを基に、今後も愛南町の未来や、被災後の愛南町について考え続けていきたいと思います。</p> <p>今回の会に参加して感じたことは、防災意識の高い人々だけでなく、防災意識がまだ十分に持っていない人々に向けた対策が必要だということです。</p> <p>フォーラムに参加されていた方々や、防災意識の高い人は、既に準備が整っており、事前復興への意識も強いと思います。</p> <p>しかし、参加できなかった方々や、防災について深く考える機会のなかった方々は、まだ「自分ごと」として認識できていない可能性があるのではないのでしょうか。</p> <p>そのため、そうした方々にも防災意識を高めてもらえるような情報発信を行うことが重要だと感じました。</p>
<p>南宇和高校生④</p>	<p>私が思う愛南町の目指すべき町は、「自分が助ける町、自分が助かる町」だと、今日の議論を通じて感じました。</p> <p>正直に言うと、もし被災したときに周囲の状況を見る余裕はないのではないかと考えています。実際に災害が起きたとき、自分や家族がしっかりと連携できるのかを改めて考えると、不安に思うことがたくさんありました。</p> <p>そこで、事前の準備を整えることで不安を軽減し、少しでも周りを見る力を養っておくことが重要ではないかと感じました。例えば、避難所の運営に高校生として関わることができるなら、これまでの活動や学びを生かし、町や地域の人のために貢献できるのではないかと考えています。そのためにも、コミュニティの大切さをもっと多くの人に知ってもらい、私たちの活動を広めていきたいと思いました。</p>
<p>南宇和高校生⑤</p>	<p>これまで防災活動の一環として事前復興まちづくりについて考える機会がありましたが、今回のお話を聞いて、復興後の子供たちの心のケアや、被災前よりも暮らしやすい環境の整備が必要であることに改めて気付きました。</p> <p>復興後の生活の質の向上も、事前復興の段階から同時進行で考えていくことが重要だと感じています。私は一本松に住んで</p>

<p>二神委員</p>	<p>おり、津波の心配は比較的少ない地域ですが、「津波が来ないから大丈夫」と油断してしまうと、防災意識が低下してしまう恐れがあります。そうなれば、私たちが今取り組んでいる活動の意味が薄れてしまいます。</p> <p>そのため、高校生としてまずは自分たちの住んでいる地域を大切にしながら、私たちの思いを伝える場を設けて、発信の機会を作っていきたいと考えました。</p>
<p>山本アドバイザー</p>	<p>南宇和高校生の皆さん、ありがとうございました。 それでは、アドバイザーから一言お願いします。</p> <p>復興の場面では、様々な課題が一気に表面化し、それに対処しなければならぬのが現実です。</p> <p>地域ごとの問題や元々抱えていた課題が、災害によって更に加速することもあり、そのために、事前に方針をしっかりと定めておくことが大切です。復興計画の目的は、正に「適切な方針を立て、復興を円滑に進めるための準備をすること」にあると思います。</p> <p>本日も皆さんから様々な御意見をいただきながら、「どのようなビジョンを持つべきか」を議論していますが、こうした対話が重要です。</p> <p>特に、本日の防災フォーラムでのお話にもありましたように、「そのとき被災した人だけで復興の方針を決めてしまうのは問題であり、次世代のことも考えるべきだ」という御指摘がありました。この点は、全国的にも共通の課題です。各地で事前復興計画の策定が進められていますが、「一度作った計画を何年後かに必ず見直すこと」も同じくらい重要だと考えています。つまり、ここにいる高校生や中学生、小学生、更にはこれから生まれてくる子供たちが、将来的にこの計画を見直し、より良いものへと発展させていく仕組みを作ることが大切なのです。</p> <p>そのためには、単に計画を作るだけでなく、「事前復興や防災について考える教育の場」を設けることも不可欠だと考えます。防災教育については、すでに愛南町とともにプログラムが作られていますが、これを「命を守るまちづくり」という観点からも発展させていくことが望ましいのではないかと思います。こうした取組を、是非復興計画の中にも位置付け、継続的に検討していただければと思います。</p>

菊池アドバイザー

被災後の状況を考えると、まず、住民の方々に「今の状況をどう感じているか」を聞くこととなります。どの災害でも共通するのは、住民の方々が「この地域で再建しようか、それとも別の場所に移ろうか」「商売を続けるか、やめるか」など、様々な判断に悩むということです。

このとき、「もしこの地域に残るなら、こんな復興のビジョンを描いている」という明確な方向性が示されているかどうか、とても重要になります。それがないと、住民の方々はずっと迷い続けることになってしまいます。

だからこそ、「目標」や「目指すべき姿」は、被災された方が「ここで生活を再建しよう」と思えるような内容になっているかを、もう一度しっかりと確認する必要があります。

一言で言えば、先ほどの生徒さんたちが話していた「自分ごととして考えられる」計画になっているかどうか、「これがあるなら、ここで生活を再建しよう」と思える内容になっているかどうかということが、この計画の「住み続けたいまち」という目標につながる部分であり、事前復興計画の中で、「被災後の安全で豊かな暮らしが想像できるかどうか」がポイントになってくると思います。

そういう意味でも、生徒たちの発言には、非常に大事な視点が含まれていると感じました。また、町の方々にお願いしたいのは、事前復興センサスの結果をしっかりと整理し、地域の方々の意見をしっかりと反映していくことです。

そうすることで、「町外へ流出しそうな人はどんな悩みを抱えているのか」「どのような課題があるのか」が、より明確になるはずです。そして、それらの課題を解決するために、皆で一緒に頑張ろうと思えるような計画にしていくことが大切です。

羽藤アドバイザー

高校生の皆さんからも「避難が困難な人々のことがどれだけ考えられているのか」という問題提起がありましたが、これは非常に重要な視点だと改めて感じました。

事前復興計画の中にこの視点をどのように組み込むか、しっかりと考えていく必要があります。

やはり、建設業や農林水産業といった産業復興に目が向きがちですが、復興はそれだけでは成り立ちません。地域には、様々な立場の人々が関わっているということを忘れてはいけません。そういった観点も含め、より幅広い視点で事前復興計画を考えていくことが重要だと感じました。

	<p>次の展開として、若い世代が主体的に関わるまちづくりの流れを、更に広げていけるよう期待しています。</p> <p>最後に、大人の責任として感じるのは、愛媛県や国の関係者がこの場に参加し、意見をいただいていることの意義です。やはり、高速道路の建設が町の骨格を大きく変えることになるため、その影響を考えた上での復興計画が必要です。四国のほかの地域では、高速道路の高台部分を活用して移転用地を確保したり、計画的に土地利用を進めたりする事例もあります。</p> <p>こうした事例を参考にしながら、土木関係者を始めとする様々な分野の専門家と協力し、町全体の方向性を検討していくことが求められます。</p> <p>また、これだけ多くの高校生が前向きに復興計画に関わり、「自分たちの行動を変えたい」と強く思っていることは、大変心強いことです。こうした若い世代の取組が、ほかの生徒たちにも広がりつつあると感じています。そこで、彼ら、彼女たちの活動の場を、町としてもっと積極的に支援し、地域の商店街などでも見える形で発信できるようにしていくことが大切ではないかと考えます。</p>
二神委員	<p>最後に私から一言申し上げます。</p> <p>今の状況を考えると、やはり避難環境の整備はしっかり考えていかないといけないなと感じます。</p> <p>地域ごとに、「犠牲者を出さない」という意識をしっかりと持って、どうしたら支援が行き届くのか、防災について具体的に考えながら、行政とも連携していくことが大切だと感じています。</p> <p>それでは、事務局に進行をお返しします。</p>
土居課長	<p>御協議ありがとうございました。事務局から連絡します。今後の会の開催ですが、次回「第4回策定懇話会」は、役場庁内での計画検討の進捗を鑑み、来年度の秋頃、約半年後の開催を予定していますので、よろしく申し上げます。</p> <p>それでは、以上で第3回愛南町事前復興計画策定懇話会を終わります。</p>